

経営情報分析システムの概要

荒木賢二

宮崎医科大学医学部附属病院医療情報部、同経営企画部

宮崎県宮崎郡清武町木原 5200

TEL 0985-85-9057

FAX 0985-84-2549

E-mail taichan@post1.miyazaki-med.ac.jp

1. はじめに

経営情報分析システム (以下本システム)は、病院の経営分析を行うために、平成 10 年度にプロトタイプの開発に着手したのが、始まりである。施設間比較を行うことを重要な機能と考え、当初より (現在も)ベンダー間の違いを吸収し、データの共通化を行うことに重点を置いていた。

また、診療におけるすべての収支が計算可能であることに目標に置いている。

大学の特殊性に配慮しつつ、マスター設定により、多様な病院に適用可能な柔軟な設計となっている。さらに、本システムは、決められた帳票を作成する機能より、その時々での自由な分析に対応できることを重視した設計となっている。

2. システムの概要

経営情報分析システムは、各施設固有の経営分析情報を共通の経営情報共通フォーマット(P-FAIR、H-FAIR)に変換し、共通化された情報に対して、流通性の高い情報抽出・解析システムをアドオンし、効率の良い経営分析システムの開発を行おうとするものである。

経営情報分析システムの特徴として、次のものが挙げられる。

- 収入、支出の両者を網羅し、収支 (利益)を計算できる。
- 収入、支出とも、日ごと、患者ごと、診療行為ごとの粒度で情報を抽出する。細かな粒度で情報を保持しているため、多様な集計に対応できる。
- 全ての情報は、共通フォーマットに変換されているため、施設間の違いを比較するのに適している。

共通フォーマットに変換されているため、今後共通フォーマットに対応した分析システムを開発することが容易であり、また、開発したものを他施設へ流用可能である。

3. 経営分析機能

(ア) 部門別原価計算結果と活用

材料、経費、人件費、減価償却費、資産減耗損、等の全ての支出を算定し、診療科別に振り分けることにより、診療科別の収支が算定可能である。本システムでは、診療行為ごとの原価計算を行っているために、診療科ごとの集計を行えば、診療科別原価となり、実施部署ごとの集計を行えば、病棟、外来、中央診療部門ごとの原価計算となる。

(イ) 診断群別原価計算と活用

入院から退院までの診療行為ごとの原価を、患者の診断群 (DPC)で集計することにより、診断群別原価計

算が可能となる。診療内容の分析に立脚した運営改善を行うためには、診断群別の原価(収支)分析が必須である。

(ウ) クリニカルパスへの活用

クリニカルパスを全病院的運営改善活動あるいは TQM (Total Quality Management) における診療プロセス管理ツールと考えれば、クリニカルパスの原価計算は必須である。作成したクリニカルパスに最も近い患者の実データや、クリニカルパスを仮に適用したダミー患者の原価により、クリニカルパスの原価計算が可能となる。

(エ) ベンチマーク

経営分析において、なんら評価を行わないのでは分析を行う意味がない。経営分析を行う上で、問題点を浮き彫りにするためにも、施設間比較(ベンチマーク)は重要である。経営情報分析システムの最大の特徴は、施設間比較が行えるようにデータ形式だけでなく、データの解釈も共通化したことである。

4. プログラム上の特色

データベースは、Cache 'を使用し、GUI(画面)は、Visual Basic を用いて開発されている。Cache 'と Visual Basic 間の結合は、通常は ODBC を用いているが、患者情報検索、経費算定、DPC 分析などのパフォーマンスを重視した処理については、M 言語 (CacheObjectScript) で書かれており、Vism を用いて、Visual Basic と連携している。M 言語を用いることにより、高速化が図られた。

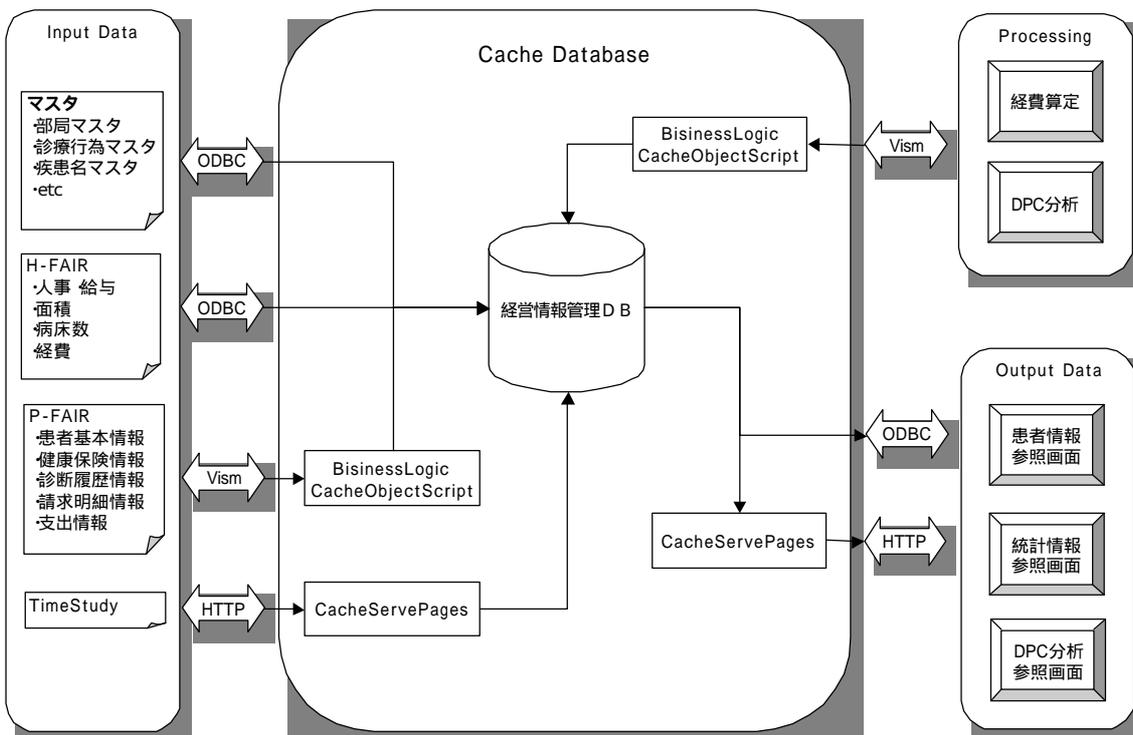


図 . 経営情報管理システム概念図